

# こわれた千の楽器

野呂 昶 文  
 天野 恭子 絵

1 ある大きな町のかたすみに、楽器倉庫がありました。そこには、こわれて  
 使えなくなった楽器たちが、くもの巣をかぶって、ねむっていました。

2 あるとき、月が倉庫の高まどから中をのぞきました。

「おやおや、ここはこわれた楽器の倉庫だな。」

3 その声で、今までねむっていた楽器たちが目を覚ましました。

「いいえ、わたしたちは、こわれてなんかいません。働きつかれて、ちよつ  
 と休んでいるんです。」

4 チエロが、まぶしそうに月をながめて言いました。そして、あわてて、ひ

びわれたせなかをかくしました。

「いやいや、これはどうも失礼<sup>しつれい</sup>。」

5 月は、きまり悪そうに、まどからはなれました。町は、月の光に包まれて、

銀色にかすんでいます。

6 月が行ってしまつと、チエロは、しょんぼりとして言いました。

「わたしは、うそを言ってしまった。こわれているのに、こわれていないな  
 んて。」

くすると、すぐ横のハープが、半分しかないげんをふるわせて言いました。



器 キ  
 倉 くら  
 巢 す

覚 さます  
 さめる  
 おぼえる

働 はたらく  
 おぼえる

チエロ



包 つつむ  
 ホウモ

ハープ



「自分がこわれた楽器だなんて、だれが思いたいものですか。わたしだって、ゆめの中では、いつもすてきなえんそうをしているわ。」

「ああ、もう一度えんそうがしたいなあ。」

8 ホルンが、すみの方から言いました。

「えんそうがしたい。」

9 トランペットも横から言いました。

「でも、できないなあ。こんなにこわれてしまっていて、できるはずがないよ。」

10 やぶれたたいこが言いました。

「いや、できるかもしれない。いやいや、きつとできる。たとえば、こわれた十の楽器で、一つの楽器になろう。十がだめなら十五で、十五がだめなら二十で、一

つの楽器になるんだ。」

11 ビオラが言いました。

「それは名案だわ。」

12 ピッコロが言いました。

「それならばくにもできるかもしれない。」  
もっきんがはずんだ声で言いました。

「やろう。」

「やろう。」

13 バイオリンやコントラバス、オーボエ、フルートなども、立ち上がって言いました。

14 楽器たちは、それぞれ集まって練習を始めました。

「もっとやさしい音を！」

「レとソは鳴ったぞ。」



ホルン



ビオラ



案



ピッコロ



コントラバス



オーボエ

「げんをもうちよつとしまして……。うん、いい音だ。」

「ぼくはミの音をひく。君はファの音を出してくれないか。」

15 毎日毎日練習が続けられました。そして、やっと音が出るよ、

「できた。」

「できた。」

16 おどりが上がってよろこびました。

17 ある夜のこと、月は、楽器倉庫の上を通りかかりました。すると、どこからか音楽が流れてきました。

「なんときれいな音。だれがえんそうしているんだらう。」

18 月は、音のする方へ近づいていきました。それは、前にのぞいたことのある楽器倉庫からでした。そこでは、千の楽器がいきいきと、えんそうに夢中むちゅうでした。こわれた楽器は、一つありません。一つ一つがみんなりっぱな楽

器です。おたがいに足りないところをおぎない合って、音楽をつくっているのです。

19 月は、音楽におし上げられるように、空高く上っていきました。

「ああ、いいなあ。」

20 月は、うっとり聞きほれました。そして、ときどき思い出しては、光の糸を大空いっぱい(5)にふき上げました。

5



10

続  
つづける  
ソクラ

